

野生獸毛

## 鹿

鹿の毛は刷毛には古くから使われており、今でも此の毛に限るものがあり、極めて重要な資材である。鹿は其の種類が殊に多く世界各地に産し、他の獣と比べて同種の中に体の大きさに甚だしい差異がある。鹿の種類と大きさを記せば、

ヘラジカ (大鹿) 鹿中最大

体長二・六一三 m、体重、三〇〇—五〇〇 kg

産地、北米中、北部、東部シベリア、ヨーロッパ北部

ワピチ (エルク) 肩高一・六五 m

北アメリカ

アカシカ (赤鹿、大鹿) 肩高一・五八 m

ヨーロッパ、アジア中北部 (チベット、アルタイ、満洲、北鮮、中国西北部、インド北

部

シフゾウ (四不像) 肩高一・一四 m

北京 (現在はヨーロッパの動物園に飼育されるのみで野生種は知られず)

トナカイ (馴鹿) 体長一・七一二 m

北極地方、樺太、満洲北部

スイロク (水鹿、ルサ鹿) 体長二・一―二・四m

肩高一・二五―一・三五m

インド、マレー地方、中国西部、台湾

ジャバシカ (体長二m)

ジャバ、チモール、セレベス、モルツカ

シヨンプルクシカ 肩高一・〇四m

シヤム、雲南

ヌマシカ (バラシシカ) 体長二m、肩高一・一五m

インド

ライエルシカ 肩高一・一四m

インド東部、マレー、シヤム、海南島

アキシシカ 肩高〇・九―〇・九五m

インド、インド支那

ニホンシカ (日本鹿) 肩高〇・八―〇・九五m

北海道、本州、四国、九州、対島、屋久島

クワロク (ハナシカ、花鹿) 肩高〇・八―〇・九五m

台湾

マンシユウジカ

肩高〇・九一・〇m

満洲、中国、朝鮮

ダマシカ

(体長一・六m)

ヨーロッパ南部

ミユールシカ

オグロシカ

(尾黒鹿)

何れも日本鹿位

オジロシカ

(尾白鹿)

北アメリカ産

ノロ

肩高〇・八五m以下

ヨーロッパ、アジア大陸、東は朝鮮

キバノロ

肩高〇・五m

中国、朝鮮

ジャコウ

(麝)

肩高〇・五一〇・五五m

アジア中部、中国、朝鮮、樺太

マメシカ

肩高〇・二m

マレー地方、西部アフリカ

アザマ

体長一m

南アメリカ

キ  
ヨ  
ン

体長 1 m

インド、マレー、南支、台湾

之等の種類も実際はまだ多数の品種に分けられているから、実際の数はこの数倍になる。

鹿は東亜の特産で数種類あり我国には本州鹿、エゾジカ、キウシュウシカ、ヤクシカ、カモシカ等がある。本州鹿は肩の高さ〇、八三—〇、八六米で角は三つ又が普通である。

エゾジカは大形でありキウシュウシカは小形で屋久島原産のヤクシカは犬位である。

カモシカは(うし科)に属し殆ど日本特有の獣で近似亜種を台湾の高山に産するのみといわれる。

カモシカは本州、四国、九州の高山の針葉樹林帯に棲息し、けわしい岩場を好み、普通単独で暮し、つが、ひのき、しやくなげ、しなの木等の若葉や、葉ぶなの種子、あすなろ等を食い、角は雌雄共あり、年と共に多少成長し(天然記念物)となつて居る。

宮城県の金華山、安芸の宮島、奈良の春日神社等には鹿が野生的に飼われているが特に奈良といえは鹿を連想する程有名である。

(春日の鹿)によると、

春日明神は、その昔遠く鹿島国から、白鹿の背に雲華の鞍に召されて遷坐されたと伝えられている。爾来、鹿は春日の神使であり、又神鹿である。



カモシカ



サンバーじか (水鹿)



インドカモシカ



となかい

中世藤原氏出身の公郷達は、春日詣の時、奈良に着いて鹿を見ては牛車をおりて、鹿に向つて礼拝した実例さえもある。

歴史の変遷は、神鹿についても、その消長を伝えている。織田信長は南都の仏教を圧迫する政策の為に、自然益鹿にも迫害を加えた（当時、興福寺と春日社とは、藤原氏の氏寺であり、氏神であつて一身団体であつた）しかしそれに次ぐ秀吉はこれに保護を加え、徳川幕府またこれが保護政策をとつた。

当時鹿を殺した者を断頭に処した記録なども現存している。

その一つに「石子詰め」がある、石子詰めというのは、昔十三才になつた三作という少年が手習いをしていて、春日の鹿が来て草紙を食べてしまつた。大切な草紙を食べられた三作は腹立ちのあまり、そばにあつたソロバンを投げつけたところ、鹿の鼻先に当つて鹿は死んでしまつた、鹿を殺したというとがめを受けた三作は、刑罰として、死んだ鹿と抱き合せて穴に入れられ、大小の石を上から投げこまれて石詰にされてしまつた。その石詰めの跡が現在猿沢池の東にある石子詰めだというのである。これは一つの説話にすぎないかもしれないが、ほかに鹿を殺した男が断頭の刑に処された事が興福寺の古文書にも残つてゐるとの事である。

今次の第二次世界大戦中一千頭を算えた奈良の神鹿も、終戦前後の飼料欠乏と、社会秩序紊乱のために六十余頭を算える迄に減少して了つた。しかし世論はこれの増殖に極めて熱意を示し、愛護会でも全力を注いで、今日では三百八十七頭を数えるに至つてゐる。とわ云うものの今なお、密殺者はあとを絶たない上、野犬、飼犬の放し飼の為に、その犠牲になる仔鹿も少くないのが現状である。愛護会では八人の人が毎日鹿の為に働いてゐる、観光客の与える（せんべい）の他に年千貫の甘蔗がその飼料に充てられてゐる。

奈良の鹿は日本鹿であり十月中旬に角を切る。

秋風が身にしむ頃になると、奈良の公園のあちこちで鹿の鳴き声がこだまする、これは秋の情緒の一つであり古くから数々の歌によまれているが、これは発情した牡鹿が牝鹿を呼ぶ切実な恋のもだえの声なのである、強くたくましい牡にのみ子孫を残す権利が与えられ一夫多妻が行なわれる。

秋は鹿の発情の季節で牡鹿は気が荒くなり角<sup>ツノ</sup>で木を傷ついたり人間にも危害を加えることがあるので、角を切り落すのであるが、これは江戸時代二百八十年も前から引続いて行われている古都の秋を彩る行事である。

毎年十月中旬、鹿苑に棧敷を組み、幔幕を張りめぐらした角切り場で、入場料を取つて角切り行事が行なわれる。秋になつてから約一ヶ月間、公園のあちこちから捕えてきた牡鹿を鹿苑の中に軟禁しておき、角切りの当日、一回に数頭ずつ角切り場に追い込む。角切場では紺地に春日大社の紋である藤の花を染め抜いたハッピを着た十数人の勢子が手に手に投縄やダンピという捕獲具を持つて待ち受け、鹿を追いあげ投縄などを角にひっかけたてねじ伏せる、捕えられた鹿は鳥帽子<sup>みぼうし</sup>直垂<sup>ちくし</sup>の神官から水を飲まされたあと鋸で角を根もとから切り落されてしまうのである。立派な角を落された牡鹿は勢子達が手を放し、場外へ無罪放免となるのであるが、その姿は今まで立派なチョンまげを結つていた武士が丸ポーズにされたような哀れさとユーモアを感じさせ、よたよたと公園のどこかに消えて行くのである。

この行事は三日位かかつて毎年百頭前後の角が切られるのである。

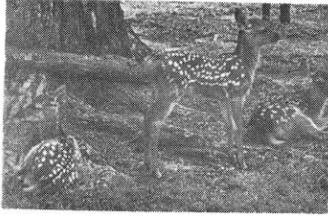
奈良の鹿の昭和三十年中の出生が八十七頭

//

死亡が四十六頭



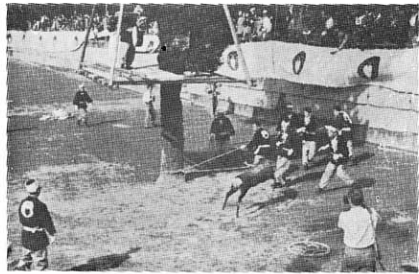
バンビ



雄じかの闘争

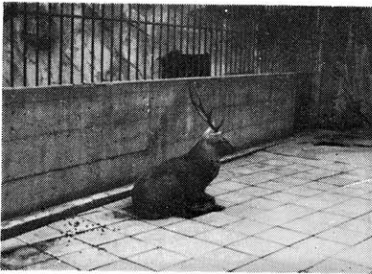


角の切り落とし



角切り行事

動物園の日本鹿



となつてゐる。

動物園などで見るあのやさしい姿の鹿に就いて、鹿の闘争（愛情な恋争い）として左の事が書かれている。

現在奈良の鹿は百五・六十頭（昭和二十七年）を数えるが、この他に春日山に棲むものが五・六十頭あると思われる。その百五・六十頭の半数が牝、そしてそのまた半数が未成年の幼鹿とすると（三才以下あるいは四・五才でも牡鹿はまだ角も完全でなく従つて全く彼等の恋の闘争の圏外にいる）三十余頭の牡鹿が春日野を舞台に恋の闘争をする選手となるわけである、そしてこの時期になると山の方から少くも数頭の牡鹿が下つて来て、この闘争に参加する。この闘争の対象はやはりこれと同数かやや多少多い数、すなわち五十頭ほどの牝を争うことになる。そして鹿は多妻獣であるからこの闘争は自ら愛情をきわめたものとなる。

牡鹿の発情は九月末ごろからはじまる、新緑とともに美しい夏毛にみづみづしい袋角を持った牡鹿は、牡鹿どうし群棲して温和そのものの生活をしているが、森の緑が濃くなるにつれて袋角が立派な三又の角に成長するにつれて、牝鹿よりも一ヶ月も早く夏毛が黒ずんできて、袋角の袋すなわち皮膚がとれ武装も完了して立派な雄姿をそなえた一個の闘士になる。

この頃の牡鹿はもはや群棲などはしない。角の皮膚をはやくはぐために、またその先端を鋭利にするために、樹幹に角をこすりつけるのが彼等の日課である、角だけでなく泥沼に浴して泥だらけになつて雄姿を誇示しようとする。この泥沼に入るのはその頃上昇する体熱を冷却するためだともいうが、頸から背中まで泥だらけになり苔や枯枝などを角に引掛けた姿は、たしかに恋の英雄の名にそむかない。

彼らには武器の手入れ、雄姿の整備のほかにさらに大切な仕事がある、すなわち地盤の確保である。

形勝の地―牡群のもつとも多く遊歩する地域―を出来るだけ広く占有することが絶対に必要なことだからである。だから闘争は牡を争うことよりも先行してまず領土占有が争われる。彼らはまずこの縄張りの争いに専念しなければならぬ。

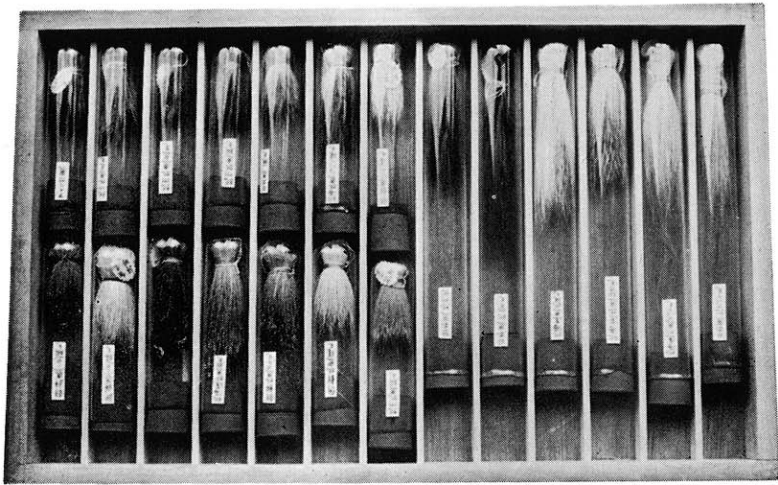
鹿の発情は十月に入つてからであるから、九月一ぱいあるいは十月の上旬までは、もつぱらこの縄張りの闘争である。

この闘争には、彼らは文字通り寝食を忘れ精根をつくす、昼夜をわかたず晴雨を論ぜず二六時中この血闘がつづけられる。春日野はいたるところ鹿の血闘の修羅場と化してしまふ。

そして来る日も来る日も角をからみ合わせ、押し合い突き合い、血みどろの決闘に明け暮れる、この決闘に押し勝ち突き勝つた勝利者の牡にのみ恋の喜びが与えられる、この決闘にやぶれ切なくも悲しい掟に目を血走らせ恋に狂う牡鹿は野生の本能に生きる野獣にかえり、この期間人間にさえ角を振りかざしていどみかかつてくる。毎年この鹿の恋の時期には観光客が何十人か角で突かれて負傷する事故が相次ぐので、この危険な角を切り落して危害を事前に防ごうとして角切の行事が行われるのである。

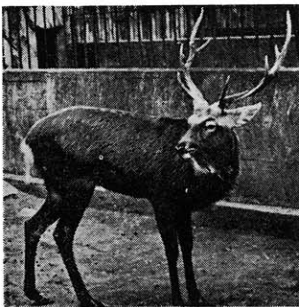
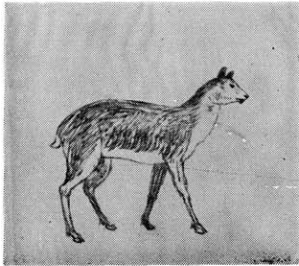
大体において体軀もさびた老牡がその貫録に物をいわせて優勢を得るようである、今年からやつと三又の角になつた牡年鹿などは、にらみ負けして敗退するのが例である。

一度敗退したらもうその地盤を犯すことはできない、だから強大な老牡によつて国境がおいおい確定したあとは、地盤を持たぬ若牡はあちらに行つては追われ、こちらの国境を犯しては追われて安定するところが無い、国境はたいがい小さい溝とか小道とか大樹とかいうものを目標に定められてしまふ、しかし適当な目標物のない地

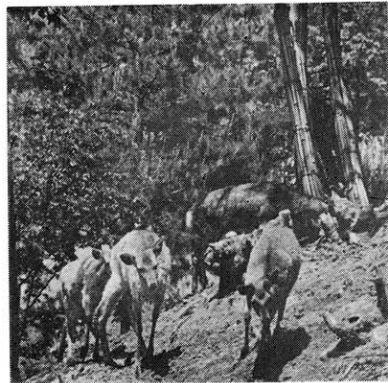


鹿 毛

の ろ



え  
ぞ  
し  
か



域、あるいは畧が多く通過する地点というようなものはつねに紛争をかもす国境であつて、この取り合ひは一応の交尾期がすんで正月になつてもまだくり返される。

国境が確定すれば、今度は自分の領内に牝群をどうして多く泊らせておくか、もつぱら苦心の存するところとなる。暴力―といつても奇声を発して威圧するだけだが―によつて領内から出ようとする牝群を牽制するのもとよりである、地境に近づいた牝群を少し遠廻りをして自分の領地に追うこと、そしてさらに大切なことは間隙をねらう不屈きな若牝を追払うこと、そしてまた領内に休息してゐる牝群の一頭一頭に接吻の愛きようを振りまくことも忘れない。

このように文字通り寝食を忘れて闘い取り守り抜いた牝群がはじめて恋の対象となる。一頭について何回交尾するのか目下のところ正確にわからないが、数回は行われるのではあるまいか、優勢な牝は二十数頭の牝を持つのである。

寝食を忘れた闘争のあげくにこれら二十頭を相手としての恋がある。如何に体力優秀な牝鹿にも交尾期を終つた正月末から二月頃には疲勞困ぱいの色が濃い。

しかも丁度その頃は野に萌草はなく觀光客のくれるセンベイも乏しい。奥山からこの時期にのみ名乗りをあげてこの闘争に参加して来た山の牝鹿は（半野性）の正月の末ごろからはふたたび姿を見せなくなる。かくて落情の遅れた牝を中心に、一応の恋をすませた老牝の恋のつづきと、若牝のやるせない恋とが二月中ごろまでは見られる。

四月に袋角が新しく生え出す頃から牝鹿は再び温和になつて、今迄の恋の闘いを忘れた様に群棲して平和な生

活に入るのである。

厳島神社の鹿は棲息し始めた年代も不詳で歴史的の意義もないようであるが、厳島神社の祭神は杵島姫命で、創立は定かでないが椎古天皇の御代との説があり鹿を大切に保護した事実はあるようで室町末期頃より特に嚴重となり、後には成文化されている。この頃より神鹿と云つて大切にされたようである。

これも日本鹿であり頭数は現在では山間に四・五十頭、柵の中に三十頭計七・八十頭居り、此所は島全体が棲息する最適地として、草、苔等を常食としてゐる。

和歌山県における鹿は有田、日高、西牟婁、東牟婁の各郡山間部（奈良県、三重県の山間部の続き）の深山に棲息してをり、種類は日本鹿であるが、カモ鹿の一種で俗に（ニク）というのも、おるとの事である。和歌山県の鹿は自然棲息で保護されていない上に深山に棲息する関係と範圍が広いので頭数は不明であるが、相当数いるといわれている。

万葉集に黄金花咲くとうたわれ、また民謡大漁歌い込みの発祥地という金華山に棲息する鹿も日本鹿であつて、推定約五百頭位といわれてをり、その棲息由来については種々いわれるが立証し得るものがない。

伝説には、昔大神宮の命により奥州に下向あらせられた、鹿島、香取の二神に随従して来たときに本島に渡つたのを嚆矢とするといわれ、或は黄金山神社の祭神が金華山に渡移せられた際、随従して来たとも伝えられるが確実な文献がなく不明で、凡らく内地山野に沢山いた鹿が牡鹿半島より本島の旧渡船場附近より移住したとも言われるが、これも確証がない。鹿の習性及び動作、特に遊泳の出来る事等から、後者の如く半島の山野に棲息していた鹿が渡島したものと考えられている。ここに棲息する鹿は約四百頭乃至五百頭位でそのうち牡鹿百五十頭、

牝鹿二百頭、五才以下の幼鹿百頭位の割合で棲息していると推定されている。

金華山の鹿は終戦後の昭和二十一年より二十二年にかけて占領軍であつた米軍の一部兵士に、あわれにも多数殺されたため、境内及びその附近のものまで深山地帯に逃げてしまひ姿を見せない、様な有様になつてしまつた。昭和二十二年米軍に対し県知事から要請して、殺りくを止めさせたので、その後神社附近の鹿山、旭、忍両公園地帯、特に旧渡船場先の鹿原といわれている処に相当棲息し、神社境内にも参道附近にも三頭五頭と連添つて出て来るようになった。

鹿の角は早いものは三年目に三枝になる場合があるが普通六・七年たつて三枝になるといわれる。

なお四枝を持つ鹿は現在内地に棲息していないエゾアカシカ（三十年前の文書には東北地方に棲息していた事が記録されているがその後十年間位にて絶滅したといわれている）のみといわれていたが、昭和二十六年及び昭和二十七年の猟期に四枝角の鹿が牡鹿半島の県営猟区である鮎川町及び萩の浜で捕獲されたので未だ内地にも種族が残つているものとみられている。

北海道に於ける鹿は明治初年までは相当数、群棲して居り、其の数は大よそ二十万頭に及んだと推定されている。きたぐにの動物たち、に「大雪の悲劇」としてエゾシカの事が書かれている。

明治十二年の一月から二月にかけて、北海道はかつてない大雪が降りつづいた。

さらに悪いことに、その間とつぜん雨の降る日もあつた、山は深い雪にとざされ、雨のため表面がコチコチに凍りついた、困つたのは草食の野生動物たちだ、雪を掘つてササなどを食べているエゾシカは、とくに大変な事態をむかえた、表面がかたくて掘ることもできないのだ、根室牧場では、放牧されていた馬も百四十一頭が死ん

でしまつた。

鹿の餓死も始まつた、とくに日高や十勝がひどかつた、この地方は例年雪が少ないので、冬になると中央部のエゾシカが大群となつて移動してくる。それが一挙全滅の危機に瀕したのだ、いたるところの海岸に、山から鹿がおりてきては、波うちぎわに流れつくコンブやモを食べ歩き、人間につかまつた、十勝川の支流トシベツ川などは、鹿の死体が折り重なつて川を埋め、そのまま夏をむかえたため川の沿岸数十キロというのは水がくさくて飲めなかつたと伝えられている。十勝以東でこの年に拾われたエゾシカの角は数十万本にも及んだ。

乱獲のため減少のきざしがみえていた鹿は、この悲劇があつてから急カーブをえがいて姿を消していつた。この頃までの北海道には、どんなに鹿が多かつたことか。

明治二年いまの札幌市の苗穂に、この地区最初の移住民として中山久蔵さんが渡つてきた、あたり一面が大森林だつた、開墾をはじめてソバをまいた、ところが三、四百頭もの鹿の大群があらわれ広い畑も一夜で丸裸にしてしまう。久蔵さんはソバが生える時期には毎晩板をたたいて「夜まわり」をした、それでも油断しているとゴツソリやられるので、畑のまわりに高さ二メートルほどのサクを作つて防がねばならなかつた。

また北海タイムスによると、こんな話もある。やはり明治二年、札幌にいた深谷鉄三さんは、いまの繁華街「ススキノ」へ、鹿の喧嘩を見物にでかけた、ススキノも当時は大森林で、このときは、何百という鹿の群が集り、総大将の牡鹿同士でツノをつきあつて格闘中だつた、勝つた方の大将が藻岩山の方へかけだすと、鹿の大群は同時にこれにつづき、ゴーツという音を森中にひびかせて走り去つたという。

明治初年に鹿の皮が数万枚もフランスに輸出され、角も中国に薬用として輸出された、明治十一年には、勇弘



郡植苗村に官營の鹿肉カンヅメ工場さえできたが、あくる年が大雪による鹿の悲劇、二年足らずで工場は閉鎖された、これほどたくさん鹿がいたから、アイヌはこの肉を主食にしており、鹿のアイヌ語「ユク」は、同時に「食べもの」の意味でもある、その後北海道の開拓が進むにつれて年々減少の一途をたどり大正九年には絶滅寸前となつたのでついに禁猟、戦時中は人間が鹿のことを忘れてしまつたのが幸いし、また現在は年間捕獲数が制限されているため最近ではかなりふえ、一部の畑を荒らすほどになつた、いま全道での棲息数五千頭以上といわれるがまだまだむかしの比ではない。

また水泳ぎの達者なエゾシカは冬大雪で餌がなくなると渡島半島の恵山岬に集まり、青森県の大間岬めざして群れのまま押渡り、そこにつくと下北半島の西方海岸をたどり、ついで南つたいに東へ泳ぎ上陸、恐山、田名部に出、低地を南に走り、八甲田、十和田の山地にはいつて、しばらく骨休みする、その内岩手県、秋田県に行つて居つくものもある、しかし大部分の鹿は一、二年後には津軽半島の山々を西北へと進み、竜飛岬から海峡に泳ぎ出し、奥尻島目指して北へ行き久遠、瀬棚などに出て、陸生生物がこえかねているものが多いといわれている津軽海峡を泳ぎ渡つて上陸し、渡島半島の山々、それから北や東の広い山地に帰るのである。

北海道を旅する人は、浅い川などに、家族づれとも思われる、すこしばかりの鹿の群がいて自分達は保護されており絶対に犯されないので知つているかのように悠然として旅人を眺めているのを見かける事があるが、まれにみる趣ある風情で、こよなく旅情をなぐさめてくれる。

北海道の鹿はエゾシカであつて内地産のものとは若干種類を異にして居る。

京都周辺の愛宕山、比叡山、牛尾山、東山連峰などに約二千頭位の鹿が棲息しているものと推定されており、

九州の屋久島の外に鹿兒島の西のはて、天草灘に面する小島阿久根大島に約百二十頭の鹿が棲息しており、八ヶ所<sup>ハツカ</sup>の靈場と通路で知られる四国の伊予宇和島の南、船越から海上四キロにある小島、西海鹿島は古くは伊達藩の狩獵地で野生の鹿が棲息している。

古、撰津国夢野に住む牡鹿あり、妻の牝鹿もこの野におり、妾なる牝鹿は淡路島に居る、この牡鹿一夜、妻のところに宿り、明朝に至りて、昨夜、背に、霜降りて、草の生えたる夢見たるは、何の兆ぞと語るに、妻の牝鹿は、牡鹿が妾の許に通ふを憎み、詐り告げて、草の生えたるは、矢の背上を射るの兆、霜ふりしは、肉の塩づけにせらるる兆ぞ、汝、淡路島に渡らば海上、船に逢ひて、射殺せらるべし、というに牡鹿、聞きいれずして、淡路島に渡りしに果して海路、船に逢ひて射殺せられたり、との伝説が撰津風土記にある。

昔鹿は加茂神社、春日神社の神使と思うがためか、仏教の影響によるか、鹿を食するは穢多しとなし、訓の鹿(しか)と呼ぶ事を忌み、音の鹿(ろく)と呼んで食したというが、訓で呼んでも音で呼んでも同じであろうが、牛も食する時は牛ぎうと呼んでいる。一夫多妻の鹿の肉は精をつける効ありと思われており、特に寒中の鹿の肉は甘温にして、毒なきを以て、よく中を補い、氣を増し、一切の風虚を療し、血脈を調うと云われ、葉として食べ、これを食べるものを薬いといつたが、よほど穢れたものと思われていたものか、蕪村の句に

くすりくひ隣の亭主箸持参  
がある。

鹿の毛は大体暗赤褐色であるが、夏と冬との毛の比較は馬、豚、羊などより極端な相違がある。毛色も同一条件のもとに保護されて棲息するものでも相当差異のある事が認められる。

夏毛は初夏より換毛を始め柔らかい赤味がちの栗茶色で胴から背にかけて鮮明な白色斑紋を呈する（通称鹿の子模様という）

夏毛は小筋で長さも短かいが冬毛に比べ弾力もあり空洞も細いため、柔かのに強靱であり、極めて優秀で利用面も多いのであるが、市販される事が少ない。

これは鹿は牛、馬、豚のような家畜と違つて野生のものを獲るのであつて、猟の許されるのが（十二月から二月迄に限る）冬毛の生えている期節で夏期には猟が禁ぜられるので、夏毛は、たまたま密猟によるものが出廻る程度であるためである。冬毛は九月頃より漸次汚暗褐色一様になるが僅かに肩部背部等に白斑の痕跡を有する。

冬は首筋、背筋等は見事な色彩の長毛が生え、耳の基部の一部、口角下齶部も白色を呈し、特にでん部には長い白毛を有し、毛として見た場合、胴毛よりはるかに美しいものであるが。刷毛に使用する場合は胴毛には及ばず特殊の刷毛に多く用いられる。

鹿の足毛は、馬の足毛が優秀であるのに対し非常に悪い、しかもそれは毛先が磨滅して悪くなつていてあつて、これは馬と違つて野生で山野を走り廻るためであらう。

鹿毛は刷毛に用いられる毛の中で最も特長あるものであつて毛の真の空洞が極めて太い、その、め非常に軽い。また空洞が太いため鹿毛を刷毛として綴じた場合、空洞が潰れるため、締めた部分が薄くなり毛先の部分が極端にひろがる（図面参照）そのため、刷毛として用いる場合、利用面によつて他の毛にみられぬ特殊な味わいを生ずる。

また他の毛に比して強靱の度に劣るため、その利用の面も限定されて居るが、液体を含み保つ度合は他の動物

の毛の遠く及ばぬ特質を有する。この特質を促え鹿毛は主として染物（友禪、紅型、小紋、浴衣等）の型置き用の刷毛と毛引、ローケツ染また伸子張りに使う糊刷毛に多く用いられ、その利用の範囲も国内全土に涉つてゐる。